



梅光学院中学校・高等学校

「新しい世界を切り拓く」主体性を育み
他者のために貢献できる人材を育成



樋口 紀子 校長
学校法人梅光学院理事長・学院長
梅光学院大学学長

縦の繋がりを
活かした教育が強み

プロテストの宣教師・ヘンリー・スタウト夫妻が長崎に英語塾を開設して以来、同校は152年にわたり、キリスト教信仰に基づく教育を行ってきた。樋口紀子校長は「建学の精神は『強くしなやかな精神と、新しい世界を切り拓く能力を、他者のために用いることのできる人間を育てる』です。主体的に自ら考え、行動できる生徒の育成を重視しています」と話す。学校法人梅光学院は、幼、中



只木 徹 主幹教諭
事務局長
梅光学院大学
副学長・教授・事務局長

高、大、大学院までの総合学院に発展しており、樋口校長は同法人の理事長・学院長・大学学長も務める。「Wake-Up全員留学」(2020年参照)をはじめ、大学で評価が高かったプログラムを中高でも取り入れたたり、中高生が年に一度、大学でSDGsをテーマにした英語でのプレゼンコンテストを開催したりするなど、法人内の縦の繋がりが強みです」と胸を張る。

主体性を育む
独自の取り組み

生徒の主体性を育むためにに行っている独自の取り組みが主に2つある。「ドラマエデュケーション」(中1〜高2)と「探究ゼミ」(中3)及び大学等連携「卒業研究」プログラム(高1〜高2)だ。

ドラマエデュケーションとは演劇の手法を用いて生徒の自己表現力やコミュニケーションを高める教育のこと。劇団で活躍しているプロの教員が指導。授業の中で誰かを演じることでその人の気持ちを慮ったり、どのように人間関係を築いていくかを考えたりする。

重村雄太教頭は「すべての土台となる力として、本校ではドラマエデュケーションに力を入れて取り組んでいます。自分と



法人のスケールメリットを生かした高大連携。キャリア教育や高校と大学の共同研修も

異なる立場を演じることで、相手はどう思うか、どんな言葉をかけたらいいかなどわかるようになります。高2にもなると相手の立場を尊重しながら、堂々と自分の意見を言えるようになり、人を惹きつける魅力も漂ってきます」と話す。

一方「探究ゼミ」は、探究的な学び方を身につけるプログラムだ。中3では進め方など手法を学習し、高1ではグループ探究、高2になると自分の好きなテーマを決めて調査研究を深め、最後に論文を作成し発表する。「他者に価値をもたらす喜んでもらえるような結論となる論文を書くよう指導しています。各生徒の志望大学を聞き、その大学にお願いして生徒と一緒に訪問。論文の添削指導を受けています。というのも、自分が将来どんなことで貢献できるのか、そのためにはどのような進路を選択したらいいかを作成を機によく考えてほしいからです」と重



重村 雄太 教頭

になって校長と一緒に考え、今の時代に合ったものに作り変えている。5年前、当時の生徒会長(高校)が「校則を自分たちで見直したい」と樋口校長に提案。「理由をしっかりと説明できれば検討する」と返事したのがきっかけだったという。

「学校が決めた校則を一方的に押し付けるのは簡単です。生徒たちは遵守するか反発するかどちらかで、何も考える必要がありません。ところが、生徒自らがこうしたいと言いついたなら、自分たちで考え、こちらが納得のいく理由を提示しなければいけません。これは主体性を育む素晴らしい機会だと思っています」(樋口校長)

一例をあげると、ナチュラルメイク(高校)、女子のネクタイ、

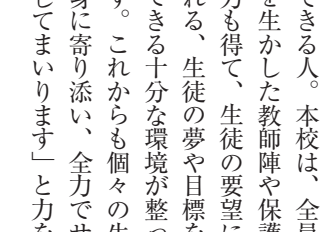
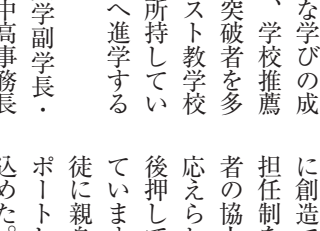
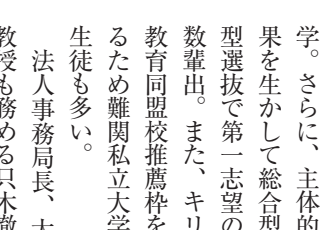
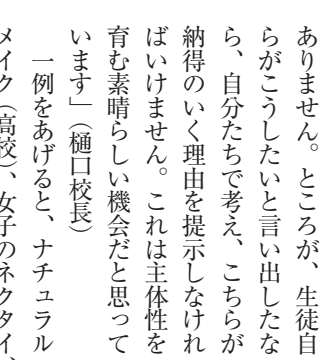
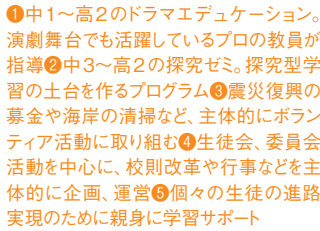
スラックス着用や男子のスカート着用、月に1度、私服での登校可(中高)など。現代の価値観に合った校則にアップデートしている。生徒たちは学校から与えられた「当たり前」に疑問を投げかけ、では、どうしたらいいかを自分たちで考え、議論し、時代に合った適切な答えを見つけ出していく。「そうした生徒たち主体的な取り組みが本校をより良くしていく力の源泉となっています」(樋口校長)

進路については国公立では九州大学、熊本大学、会津大学など、私立では早稲田、上智、ICUなどの難関大学にも複数進学。さらに、主体的な学びの成果を生かして総合型、学校推薦型選抜で第一志望の突破者を多数輩出。また、キリスト教学校教育同盟校推薦枠を所持しているため難関私立大学へ進学する生徒も多い。

法人事務局長、大学副学長・教授も務める只木徹中事務局長

は「授業時間やテストの回数を減らし、生徒たちがやりたいことに取り組めるカリキュラム編成にしている。時間に余裕ができて自由度が増し、興味関心のあることにのびのびと取り組んでいます」と語る。それによって成績が悪くなったかといえは決してそうではなく、志望の大学に進学してやりたい研究に没頭したり、頭角を表して学部トップになったりする生徒もいるという。

最後に樋口校長は、「今の時代に求められているのは、自分で考え、動き、いろいろなことに挑戦して、新たな価値を未来に創造できる人。本校は、全員担任制を生かした教師陣や保護者の協力も得て、生徒の要望に応えられる、生徒の夢や目標を後押しできる十分な環境が整っています。これからの生徒に親身に寄り添い、全力でサポートしてまいります」と力を込めた。



①中1〜高2のドラマエデュケーション。演劇舞台でも活躍しているプロの教員が指導②中3〜高2の探究ゼミ。探究型学習の土台を作るプログラム③震災復興の募金や海岸の清掃など、主体的にボランティア活動に取り組む④生徒会、委員会活動を中心に、校則改革や行事などを主体的に企画、運営⑤個々の生徒の進路実現のために親身に学習サポート

村教頭はいう。

重村教頭によれば、生徒たちの多くはそれをよく理解しているため、本気で志望の大学を目指すし、満足して進学しているとのこと。

「生徒たちが社会に出たとき、自己実現をしながら、自立して生きていけるよう、中高時代に

その礎をしっかり築いてほしい。それが私たちの一番の願いです」

学校の「当たり前」は
生徒の力で変える

同校では生徒たちが学校行事や委員会活動などを主体的に企画、運営。校則も生徒会が中心

PICK-UP



中学：オーストラリアの中学生と交流

中1生、高1生の学年 全員が参加する 「Wake-Up全員留学」

入学早々に中学と高校で行われる恒例行事が「Wake-Up全員留学」だ。中1はオーストラリア(約2週間)、高1はフィリピン(約3週間)へ学年全員で留学する。「入学後、英語もままならぬままいきなり異国に行くわけですから、中には帰りたいと泣き続ける生徒もいます。しかし、そんな子でも1週間もするとなんとなく相手が言っていることがわかるようになり、生活にも慣れてきます」(樋口校長)。こうした貴重な異国での体験は文字どおり「目覚め」となり、帰国後、学びの大きな動機づけになっているという。

